

YMCA Camp Stories vol. 01

時代に合わせて キャンプは変化し続ける

酒井 哲雄

Sakai Tetsuo

日本キャンプ協会名誉会長
元大阪 YMCA 副総主事
頌栄短期大学理事長



▼ 海洋国日本を担う若者たちへ

阿南国際海洋センターを作ったのは、日本列島で暮らす日本人にとって海は重要な生活の基盤であり、海を知らねば世界と繋がらないという信念があったからです。センターのモデルとしたのはアメリカノースカロライナ州の「Camp SEAGULL」。

海洋プログラムを通してキャンパーが成長していく素晴らしいキャンプ場を視察し、感銘を受けました。阿南海洋センター開設時には、“子ども達にとって良いものは何か”という一貫した思想の中で海洋体験、生活体験全てを考えました。カッター・ボートを設計するにしても、当時の日本人の子どもの体格・体力を調査し、子どもたちに合ったサイズで特別に発注したものです。本当に良いものを提供するためには、準備が必要で、だからこそ上質の「本物体験」を提供できたのだと自負しています。

▼キャンプが人に与えるもの

生活の知恵や本物体験。それらはキャンプを形つくる大切な要素です。しかし、それらは手段であり目的ではありません。キャンプは何を目的としているのか、と問われれば、それは「人格形成」のためであると言えます。

1830年代、社会的な背景の中で、子どもたちの笑顔が失われていった時代がありました。その笑顔を取り戻すために、アメリカのニューイングランド各地に一つの試みとして作られた教会の中の砂場から、「プレイグラウンド・ムーブメント」が起きました。

両親の共働きや都市化、教育の高度化などにより、子どもたちの遊ぶ時間や空間が失われていく社会において、キャンプは大きな役割を担うこととなります。阿南国際海洋センターにおける「本物体験」へのこだわりは、子どもたちの成長のために、「遊び」や「体験」、「笑顔」がいかに大切であるかを考えた結果なのです。「少年よ、大志を抱け」で有名なクラーク博士は、もうひとつの言葉を残しています。「Be Gentleman!（紳士たれ!）」。キャンプの本質は、やはり人格形成に多大な影響を与えるところにあるのでしょうか。



「本物体験」にこだわり抜いて、当時の日本人の子どもたちの体型・体力に合わせて作られたカッター・ボート。

▼キャンプ 100 年、そして次の世代へ

今の日本のキャンプは停滞期にあると感じています。子どもたちの生活様式に合わせて、キャンプスタイルを変化させていくべきでしょう。大きな自然災害時にキャンプ経験者が活躍をしたこともあり、キャンプには不便・不自由・不足を克服し体験する防災教育としての側面も持ち合わせています。しかし、今の子どもたちが置かれている一番の課題に向き合うべきでしょう。超情報化社会が加速度的に進み、話す・触れ合うなどの基本的な対人関係が失われている時代において、まさに「人間性」を回復させることができるのがキャンプであると信じています。

その基本は「気づき」です、何に気づくのかと言いますと“隣人”大きく言えば“人類全体”。次に“環境”や“社会”そして“自分”に気づくということです。

そして心と心の触れ合いをキャンプで取り戻すこと。会話や思いやりの乏しいところに「優しさ」を取り戻すのがキャンプの持つ教育力です。これらキャンプにおける全ての体験が“気づき”に焦点をあてられているべきであり、キャンプが私たちにとってのチェンジエージェントであり続けるキーワードです。キャンプが生まれた原点を振り返り、基本に戻ることが大切です。

Profile



- 1924年 大阪生まれ。
- 1950年 大阪YMCA入職、野外事業を担当。
海に囲まれた日本で、「海」を学ぶキャンプ場の必要性を訴えた。
- 1968年 日本初の海洋キャンプ施設「阿南国際海洋センター」を創設し、初代センター長に就任。
その後、国立学校法人鹿屋体育大学海洋スポーツセンターを開設し、多くの日本の青少年の成長に努めた。
- 1988年 日本キャンプ協会会長就任。日本の組織教育キャンプの発展に大きく貢献した。

【取材：名古屋YMCA中村隆】



1920年、六甲山麓で最初のキャンプが行われました。大阪YMCAが少年たちのために試みた、松林の中での2週間の簡易天幕生活キャンプで、これが日本における最初のキャンプとされています。2020年、YMCAはキャンプ100年を迎えます。